修行悟影法師

坤

へ 5
706
2

東京市豊島区小石川
餌下町百拾貳番地
坪内雄蔵

利門
弾 706
巻 2

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

蓋俳諧の虚實ハ古今の体用此体と用とハ二つのものにしてしかもおのおのそなはりてそなはりてくあやしくかなるものなる易ハも體用一源顯微無間人の性ちがんぞこれを異なるん寛大ものにしてきたまらさる附ハ表出これをいとしてものなるまてハ愚のものをおいてをやかるゆえを門ふ入てんをそ一ゑゐ入て多を捨ぞんいらぞろ見ゆ覺えををしかるくして眼耳鼻舌唇意の六根みなれ喜怒哀樂愛悪欲のせつのところみなるてい清濁善悪あり

これをまるかのいんきよくして善事あるみこれを
まつごるものいをあごりて悪事うまるなかもうを
翁これをたくさんと難難をいいてこで此道ハ分命
を捨ふハあるぞ故ハ俗僧の方を学ぶものハ
先我ハをまるづ〜ハをまるときハ性をまる性を忘
る時ハ天をまる天をまるときハ虚実自ら自生ハ
らんまるをハをまるぞ〜て道ハ入らんとまるハ邪
〜て劉後をゆくぐ〜これを翁と延宝丙辰秋
伊賀国より来教ものうて本所中ノ々完林院と
ふ禅院ハ入てハの学を修行あるこれより廉塵混

本寺佛頂禅師ハ謁ハ禅師翁の宗道未熟なるを
をげまく〜と居さいまぐ抛青〜やらそれ〜ハ
喟然ハ〜てハの方ハて禅師又いくハハ何翁答
曰此時禅師曰ハ〜有無あやと翁をこれて三十
棒をれよりハとハ切撲流麻〜て終ハ悟道徹底〜
ると日禅師曰一金鉄鑄せぞと印可〜ハ〜ハ
翁の居られ〜院ハれば〜て芭蕉山桃青寺と名付る
を後役官府及芭国ハ新ハ白牛山東盛寺と書
改〜と七世役者古学和尚ハ〜ハ〜ハ
深川隙川寺河南禅師参禅終〜問答語

佛法ハ陸奥の川越の月燈ぎやうこうしたるこゝ
ろあり
延宝六戊午年翁三十五歳みちく行て江戸ハ田原町ゟ
深川元番所橋ゟ門人桐雨一株のせゝなりて
こゝろ翁家ハ深川にて芭蕉庵桃青と名ゝむ翁三
十五歳ゟ四十歳まで家ハ深川にて

さゝやかに移り植たる日ハ
外さゝやかに植たる花の春の
翁ハ虚ふくをよりあり大虚のふくを
ふくゝゝとふくを感ずして道のたゝなる
ものを感ずるゝその日ハさゝやかに植たる
ゆゝしくてゝたゝきものゝ一念のあらはる
ゝゝ義ハきはまりてたゝのゝのゝ
二念の発するをたゝくさゝゝ人のふかはゝ
きものゝ人のゝゝハあゝきものゝを多みゝ

加つて一念あるの事なり一物にて人間
まうまふこと情なるべし
古歌
よしやとうるかの新法よくこれいるるかうう
日
新のうをとらんまるやうに一念あるれい
日
清のあのなかの甫のよう清とれ入りのうをこれ
意のうをうをうをうをこれ
あるを
六
古池や蛙飛こむ水の音
けてゐをれのまい古池や蛙飛こむとうよう
ようようようてきようようようきいかんのこの

むとは世白のことい義い事ふんを大虛ふおきこと
まふうをとうとうて大虛とい天の一極みゝ別人の
事ふうふうふをこうふおくこゝいこのこゝてこ
たのこゝあり見水音をとこ古池ふ蛙飛こむこゝ
る物のあるこい行ものであるとうこうんのふおこうを
ふうふうふしてなふものであるこ見ふうんをわのぶん
ふこうこうこうこれでふきこうとおもふいあうこゝこのれ
のやうの中てゝ古池こ蛙飛こむふのるふこうる
ものを見ふ見つけこゝふうやこ別大虛主我身
主異名同体

うれしき事の面目場のごとくにて
喜しきうちの得の妙味もなかるべしてゑんを
をとる人のこゝろ所徒にあるのごとく喪理をもつて
て万事みだるゝ故のごとく性をたもつ
ときハ性を心にうしなこゝろの色のみまをそ
れくみだるゝなりまことに人の天地の霊万物
の長たる分をわすれて男女夫婦兄弟朋友の中
にふ和あるものなくして人間とせをなる甲斐
もあるべしよくく多思ふべしこれが他なく
皆私欲にいつくられて善ふい忠孝を

ものいふ人のいきとまりなくなりぬれば我
といふこゝろなれとも義盛なりて什道を尽しくの
みなこれ義の見つけられ〳〵大虚のこゝをもるときい
見事なる皆内ふかるゝ出をもるとおもひて
して孝をもるとおもひて孝をもるゝ
を誠のよう義を情道とゝふ唯心の無別法也
決定して禅林俗諦破して正風と称めゝい
此句ゝと哉なるべ〳〵大虚ふんをおくべきいゝ
のゝこと此文言ゝ

孟子曰萬物皆備於我反身而誠樂莫大焉

たのしみの中の中なるものこそなけれ　古寺門人菊地登代女　十三歳吟

現在し

○ものうきさそ糸屑あく〳〵阪東

蓮の根つゝ入て深さのちいゝかゝるたらめを

いとみて其の人のまるところなれい編まるまゝ

ぬれたるれども蓮ゆはもたれまくで深世よ知るる

とゝ〳〵ゝまゝふ蓮を称して蓮よ徳を讃ふる風

流い実変の歌の立てこゝるゝ

切れてあのかげを立ゝせで蓮やこゝひの切ぐまゝ

風流の主味深きまゝはゝ〳〵てゝまゝ〳〵けゝく

まゝ質い白く食ゝまゝ〳〵きつゝるゝゝゝゝゝ

い深ゝゝ出るゝゝなゝく蓮を蓮蔵〳〵ゝる主味

なるゝ〳〵

古歌

蓮の中ゝまゝゝゝゝゝ

うたてうしなふこと徒に本財に害と成んかなて
の発句なり

まつもよなのあつまるむさしの風尾芭蕉翁
ちとせ
ちとせこゝにいはうこゝにてゆくすゑを教ふのことなりへりくだれ

仁流秋津洲之外恵茂筑波山之陰淵寔作瀬之聲
ジンハアキツスノホカニナガレメグミハツクハヤマノカゲヨリシゲレフチヘンジテセトナルノコエ

寂寂閉口砂長為巖之頌洋洋満耳
ジャクジャクトクチヲトヂイサゴチヤウシテイハホトナルノシヤウヨウヨウトミミニミテリ

甲斐の郡内に義行する人途中のぬきを震軒具
草の書ふあり

外 るゝ〳〵あををあをふるる事なり

るゝ〳〵と義をゆくゝあるゝゝ我を義

ゝ ゝゝゝゝと要念はなりこれでん まよ多ゝたゝゝの
一ゝゝゝ ゝゝ純ゝ ゝるゝふゝゝゝゝゝ 宣数ゝゝゝゝ ゝゝ
ゝゝゝゝゝ

秋八月千里を携らくたてまつり甲子記りあら
ゝ四きら〜紀切又そ枕そしゝ

外　四きら〜をくり泥のそむ多ふ

そ木の茂るハ陽ゝて春夏そ木のてゝハ陰
みて秋ゝ天地の盛衰吉凶屈伸止附
なゝうるもをもとにはいらゝ多みゝふをを
ゝをうのゝくのをのゝのをゝいゝきをのゝ
ひをとゝをゝふゆゝ多ゝゝゝゝのそ木せひ
茂るをゝをゝてゝをゝのゝるをゝゝるゝで
みをゝでををとをゝをひ松中四きら〜みあゝをゝ

或して外の大虜ゝをゝ石泥おをゝてハゝゝ
ねゝゝくゝいゝをゝのゝのあをゝきをゝ大ゝあのゝ
なゝゝれゝの

菩提本無樹明鏡又非臺本來無一物何處惹塵埃

ボダイモトウヱキナシメイキマウマタヲテナニアラスホンライムイチモツイヅレノトコロニカヂンアイヲ

ゝゝうゝ秋のそ木のをゝれゝばおゝ四ををあゝゝゝん

あゝをきハをきゝるの泥ゝいをゝ多ハなゝゝゝのあみを有る
大ゝ伊勢ゝ行ゝ戸のゝ人ゝ送ゝゝるゝゝ
秋ゝゝせゝゝて行ゝ戸をゝを送ゝゝ
そあゝをゝゝゝゝ見ゝをひけゝゝ行ゝをゝゝむ

賈島詩謝枋得註云旅寓十年交游歡愛與故鄉無異一旦別去豈能無情渡桑乾而望幷州反以為故鄉也

人らさんもちべ[illegible]

外猿をきく　人性子より秋の風いのよ

瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天巴峽秋深五夜之哀猿叫月

胡雁一聲秋破商客之夢巴三叫曉雷行人之

行のことのぶ〳〵樣のなきさけびいあれなるものの
ゆゑよ古人もうくのぶ〳〵おりいおるゆゑ〳〵と義樣
をまうる人こゝかゝるの樣子のまくをきうせ秋風
のさけ〳〵をませなどいうふとうるゐをうらべし
ちゝおいうてハ人ハ性若なるものゆゑふ樣ようう
小樣子のなくふあゝ是ふびんなうこおりふん男若
なること大虛ちうなくふ〳〵ちのき意とて惑あふしてきる

ごし

ちゝ
うゝらふまうらなるてあ〳〵きのあうへあるゝふやまらぬ
日少あ文てちゝび樣子のなきやむハ冊の源氏の美やうう

る士の風俗

外 乃の一の木樣ハ乃ふくゝれ乃 ア

木樣ハ中ゝけ今寄ゝハ憂美のあゝゝ行ふ用ふ

牽牛花是かう〳〵ゆゝかうう夕をまゝあゝのゆゝうう用ふ

馬醉木ゝ書

ちゝ
ゝうつなげまゝをかゝのゝゝれ弱てしくけゝゝ海ゝ長く

白ゝゝ

あさ〳〵ゝをゝゝるゝふやゝるれゝらふかの

ゝあゝゝくいゝしうてて毒ありゝれハ人もつゝゝぬ

ゝうてるゝゝのゝぬかゝれゝ道のゝゝゝゆゝゝき

て性をてるふくること百生の根をとるく檀
林飛潛希然して正風一流は大虛常住なるを
て信ずをとくべしとぞ云ふるよいとまあら
ず中ごろ城後忠柿崎百姓宗門は無教の不
孝者なるをもつて日蓮をひるがへし
て孝行者となり陽廣英いとゝきゝほどのかの不
なるしし全く翁のとくまもるやうにゆるもう
されば飛潛は歡喜憑要もるのみ他なしとまるし
旦大虛常住なるといい

老子曰道可道非常道名可名非常名

（ラウシ　ノミナトスベキハツ子ノミナニアラズ　ナノナトスベキハツ子ノナニアラズ）

物もろ〳〵のくのごとく吾愚もるをてびもらるびたく
ひとまつふをさして大虛と辛忘をいふもれ
辛忘を深りは地なるしてをうけるを十
辛万苦をいまもだ自得もるのみなるしとも
ふをとぶむるくあるべ三千世界の寶ふをつてもを
もめときかのやうに文を今大人門人をとくはし
たる妄りに
もるるもるる物しもるるを世界のこをのほぼの
くのごとくをくいい祇儒佛三教をもをべえ物教連
俳ををくいろくみるめど

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元孫元辰年旅行途中の吟

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詩

勝地(シヤウチ)杳(ヨウ)来(ライ)無(サダメナシ)定主(オホムヰヤ)大都(ヒトニハ)山蜀(アイスルヒトニシテ)愛山人

外夏(ナツ)[illegible]いまだ亂(シラミ)を[illegible]

人の多く亂のとくハ紙ゐ紙奥のとくなどなど多あ

まで聖人とつぐるも人ゐなきこゝあとゝまで大虚

[illegible]

のこきこるをはらひて私心なくのぞくこころの
つゝくぶをつゝくこゝろあり人事をもゝじてまこと
しゝ爲さくかくのごとくしらんやおのゝうぐごとき
大虛こゝろをはくるのハたゝめてこゝろつかのハ
いこのゝるかのこゝろある人あらざきまらしくのくいい
ふものうなり

夜の月よなるまてきこえぬあこうまこうの風やよきてはんん

詩

百千萬劫菩提種八十三年功德林
森々あかくしゝ日ハつれなくしょう秋の風

此句ハ月の字の下ハ一ヨ。ゝとれてこゝろをもとゝ
てこゝる樣ふこゝ十九こゝなるこゝ味いゝのゝいこゝのむ
ゝゝこゝおろくのゝるゝゝあるゝゝのゝふゝくゝのゝをこゝのむゝゝゝる
こゝこゝいのゝるゝこゝあくこゝこゝハつれく叫二百十一時ゝこゝ
こゝこゝこゝう秋日こゝこゝるゝゝふこゝゝゝ入日こゝなるゝゝゝゝく
此ゝこゝおゝゝふゝゝゝゝ老こゝなるゝ学のゝゝゝこゝゝ日
こゝくゝゝこゝゝゝ日ハつゝこゝくゝゝゝゝ大虛こゝこゝの
こゝふゝゝつゝこゝゝる心刈秋の風あきハゝゝこゝこゝのこゝ
いこゝゝる四徒五言こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
ゝこゝこゝて顏淵(ガンエン)歎(タンジテ)曰(ハク)仰(コヲアフゲバイヨイヨ)之彌高(ヨクタカシ)鑽(コレヲキレバイヨイヨ)之弥堅(カタシ)瞻(コレヲ)

之在前忽焉在後

見ようとすれども見えず聞こうとすれども聞こえず

詩

月隱重山兮舉扇喻之風息大虛兮動樹教之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日　やうの杉よりも鳥のもとゝきけだものもとゝ

浮世の杉をや風瀑をこのごろ十余日体を又ふれは

高雄一ゝ

外　ゝゝゝ風なり　みとせの杉を抱　嵐

此白いみとせの杉をいくいくあらしとゝゝゝ日のる

きもえふみとせのもとなる中のゝをもとつけるといい

ふきもやされてゝみとせの杉を抱あゝゝ

ゝゝ風なりゝゝ切ゝゝ色別花瑞基吉い盲目ゝゝ

ゝる仕合ふかゝゝ多のふゝゝ多ゝゝゝゝゝゝゝゝれ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾遺抄

[illegible]

[illegible]

詩

更無俗物當人眼但有泉聲洗我心

外業の香や葉の如

[illegible]

[illegible]

詩

蘭花自慙為俗骨槿籬不信有長生

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

閑人廉牧を訪ひて

外[illegible]て作りあるなり　この地

此白廉牧を訪ひて[illegible]

[illegible]

[illegible]

詩

晉騎兵參軍王子猷載稱此君唐太子賓客白
樂天愛為吾友

[illegible]

月

[illegible]

[illegible]

此月は涼しく秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てふてうてうてうあものをうてうのはをつくて角白 花也
てをつをうてうてうて諸うれてうてうてうてうてきてきてうへ
〳〵又曰和歌は用よりも雅みをもつ白い雅より用を
あるけちめをてあきてうのふてゑをてしかうゆうよ
雅ふは血の涙あをんてをてんつきを秋のさかの白き
をんてあをてんけしてて虚の雅より用のつ交の寒ゆて
をつき實ゆをるをれ花のをは白きうをなうゆをえ
まてうゆをてうて消ん源てあつきてつうてき、をるをてん
けしてうる源をてゆるけ入て自得をてしてうてうて
く大虚空雅より用よりてうて仁義徳習俗の路

をてうゆ　をゆをひてはは風てうてうて
をてくは禅ゆ入て禅門ゆをあてをを奇てはいをん雅
をやいをむ

をて
なをひてうをゆをんををれいきてうれて源のあををのををゆを
夢麻寺ゆ訪て立の松をえて
俗歌いてのをう死　法の　雲
代白は法の松俗歌のをいてのう死ゆて切をて
白ゆをは白をせをうてゆ雲を大虚の空のんゆ
をて歌のをは白毎て咲く歌の雲ゆをわて俗
俗をてうてうへうをるとをきをのて籠きゆのて霊

意を表して言ふんのそこゝきこゝろんとあるべし

たまつくや

詩

十八公榮霜後露一千年色雪中澁

あまつくるあくへとろこのあひはひをおもふひさしく行ものの雲

日

[illegible]

[illegible]

下考よ

[illegible]

此白い坊ゝ兼 [illegible]

[illegible]

詩

誰家思婦秋擣帛月苦風凄砧杵悲

日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

國ゝ治まれる事まことに太平記につまびらかなる事
なれども事長くして書ものがたりに侍らざるまことに
そらふらひかけて多くて又むさんなる事をその内ふと
侍らざるを惜しむるの

詩

雖レ觀レ秋月波中影未レ遁レ春花夢裡名

世の中をかりそめなる事ならけるきゆくふのあしら侍
りくのわくゝ安常觀の禪師の禪法ありてはき物ぬぎ下お
しかりてうくわくなるや

法華經序品第一の山岳城の居窟

さしてもくかさねの心ばせを爲ゝ上ものあるものもふるものも
一天萬乘の君なれども及ばぬ佛法僧三寶入道なれども人ぶく
なるべき入道の家ゝ

村しられぬむけそなるはいかなる神ぞ雲の下うけ
かるらんなれてはいのふなるゆくゝおそいのふおや
しなたまつるやとうたるゝ多みそのうてりとれいを
味あきらるゝ形ゝ義しらふいくゝ歌息のあまりもの
ふなとゝ爲まつるやもの文漢字恐の字なれ恐の俗字る
事持戒者ゝ心おのふ佛經ふなるなる

是歟今頃山中をとてはるかに寄武の月
よしつねふしをやらんかう秋の風世月をはらひ
出しく

義経の　ふく　所　秋の　風

よしつねのふく所かう秋の風ふくとしてい朝
敵退治の　勅命をかうむるの　勅命を天命と更
定て二度ひんを変じたまうあを秋の風よりてう
秋の風い陰なれ陽の春夏より変
せて春夏の　[illegible]　[illegible]　陽の春夏より変
義朝　[illegible]　[illegible]　[illegible]

るよりそもそも天命なりかくる秋の風ふくこころあり
是別秋の風の事をとうらをれよりとりてその義を
をとし給ふ事なれども天命なりかくる附
みれんをうこうさん　勅命をうけるよりもその心
秋の風ふくこころく我意の大徳と義を寄武を
うらやましく思ふ心をとりくしてあやまりくる海をと
ちうしてあ義ハ常ふ大虚をんとちうふ此旨
ふり又よりもその心をうこうのさん　勅命をうけるの
いさをこそ天地ふるもつて除ハ世ちうのふの世右を落
依朝ハ平家をとし天下泰平国を安全よ治め

の大功ふようして天地開闢以来ためしなき日
本惣追補使の重職ゑ昇進あつてこれ今く武勇
公多命のごとくに父よりてうけて　勅命をやう
うゝ無我の大徳を感歎してゑるゝ法皇の
しるふ　勅命をかゝるとうけたまはる
はるうたまゝ　ゆゑ孫たちうのさうひを
よゝくあきらむ人ハ代なれとも幸ハ天
地あらんこのきわいなをゑる者よりとも
その大徳天地ふうちうふ山ゆゝ源家よて国
家を治め清ふ仁徳のあるのときをを感

拜して句の作ををゑるゝ

詩

専諸荊卿之感激矣生豫子之投身心爲恩使
命依義輕

死ろういきろうてゑををきんよりの義文級の身　恩徐
世の手ふうををうをゑるゝ物ゑ　月
せらん　くおゝ　ろゝ　ろるむえ　月

發句三鳥傳

雪や牛のゑ影うゝ老を嘆　そせん

俗曰雪ハうゝふあゝに得具比須也得を
天ふ得る明徳具ハワナヘル比ハヤハラゲテ須ハ
モチヒの意ゝて人の幸ゑあり是則雪のうへ
づる奏と人の物言ハ別ゝて同あり竹のゑ薮
ゝ志を吟るを学て三事唯一心を発ゝる感
吟ゝ

百ゝるうへづるまゝゝの毎よあらゝまゝるゝ系ゝゝゝと

詩

年年歳歳花相似歳歳年年人不同

ゝゝのごゝく毎常を觀して大虚常住を得具比
須を知と知べし

猜ゝゝゝゝゝゝゝておけ喚ゝゝ　其角
喚ゝゝハよゝゝゝゝゝ喚古登理なりよ
へバことゝゝをうけてゝゝる人の奇妙をよ
こゝるゝゝゝ

ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ

不思議の亜一物の有一物あるとおもへばなきとみるべしよくばうるはしるを與古登理
うつ冊の胎内みてまうくる又の一滴水の理を
いふこれを又然るに角のごとき放逸我流し
のみて霧のをつけ與古登理をえて後を
ふ吸綫まねのうつがうつ　うるあうぶ後ふて
はけ與古登理を大虚空理のふを知てより
夕うを内をうあうの執うぐの名あうう
はを一風の飛修のを宇きうはけ與古
登理の一変をうるうう

あのさは稲妻をまつ後　う邪　まを

ををうあうぬ必後のうをうをうを

きたらい事をきらふ猶更世をすてゝ物事とハ名ハ別ふ
して一体なるゆへなれハ天人一致之

かゝる理のへりくだりて蛙一きゝ系をきゝる事をきゝんと

子曰天何言哉四時行焉百物生焉天何言哉

莫非天理発見流行之實不待言而可見聖
人一動一静莫非妙道精義之發亦天而已
翁亦如此哉

發句三木傳

世の人の見つけぬ花や軒の梅　芭蕉

栗ハくるあるとて久理也世の人ハ大虚のんと
きゝぬ人をきゝ軒ハ人の氣形をきゝ久理ハ人
の本性をきゝ見つけぬハ道の近きゝ あるをきゝら
ずしてきゝ カくむること久理の花ハ我幸んあれ
ハ自得するのゆへなきを他をこゝろ[illegible]

こゝろのこゝろのゆへなるあるをきゝむのきゝをきゝ
きゝのこゝハ大虚心ゆへ人の氣形ハ意氣なり
七性の生るゆへきゝ[illegible]ひゝる氣ハ水の

あるものなくきやるものれうこうのハ大虚空なと
和を栗の花ハ玉木をきるとつゝ岡玉木ハ木ふあ
らぬ氣をつゝふ木こゝ氣と亟ぬるゆゑ
こうゝれハ梅の香ゆゑ梅の花　ふ毅法師
梅ハうめ　あゝ花　得明ふり香ハ香あゝ狭
ゝをこ　故梅を狭ん木ゝらふ形う
歌　ゆゑあきくやこの花ゆゑ今をきるゝとくやこの花
この歌ハ歌の母ゝうとらひ僧ふ王仁う歌ちうとこゝも
爰ハ應神天皇王仁う爰ゆあゝれうゝゆけゆふ
ゆゑよ王仁この歌のことをきて仁徳帝を侍伝

小郎たまゝゆゑよ王仁の歌とらひ伝ふ歌のことハ
應神天皇兎道皇子を愛したまふ又君のふよま
のせ　仁徳帝位ふ即ゐ郎君をきゝて侍伝と
つゝせゆふ弟君ハ我多ありてハ君帝位ふつゝせゆハ
ぬゆゑ宇治山ふて死ぬ今の羅文の明神く
身ゝゝくのごとくなりゝて又應神天皇の後ふ
をいつゝとおぐしめゝ侍伝よつきたまゝ三とせ
ゝゆゑ王仁の歌王仁の爰ふ又君あゝれ世
御製あゝゝとかくのめく　仁徳帝の侍孝ふ後
ゝゝ爰ゝてゝゝゝぬゝと後ゝゝゝ

梅の香をたづねて行の雪かをりをふる我まこと
仁徳帝ハ文武に向ひ奉れハ文武の御の清ハ[illegible]
いとゝ我ゝ之叶ふる得所のそれ之
素堂の句や西施ゝ合歓の花
ねゝの花ハ行ゝの花ゝ合歓の花ゝ合
て歓をなるゝとゝハ句義旅中の作ふてきたるく
ゝ[illegible]あいて出者しゝる為の国辞ハ[illegible]
[illegible]一の美人西施ハ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ合歓の花と発ゝ[illegible]
ゝ万事のゝ[illegible]

いゝる事なきを[illegible]
合歓のゝ[illegible]ゝ[illegible]
なゝ
雖ニ観音威力廣大一不信不顕雖有扇風不仰不
吹
句
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
愚
[illegible]

切字結字傳

凡和歌にても発句にても切字とゝのふは差別あるゆゑにて初学のものハおもひとゝまる事あれハよくゝゝ
ぶんおくべきものなり たとへてゝそ切ハ節と同音にて
件のゆゑ一のゆゑとゝのゝきとゝのゝにて切るゝゆゑあるをむ
るゝゆゑ発句にて切とゝのゝ切とゝのゝハ唯てゝそ
ゆゑにあるゝゝゝ二とゝのゝ切とゝのゝ切とゝのゝ
ぶんあるゝゝ国をゝてゝまるゝゝゝその中にハ天の陰陽
とゝのゝゝ陰陽とゝのゝゝぬゝちハ一極一極ハ二極なり夫
地ハ未発の時ハ唯一家ゆゑにてハ一なるゝゝこゝを

なゝ色別三千世界と唯一ゆゑ切とゝのゝ切とゝのゝハ
故字なるゝゝゝ

地女の胎内(タイナイ)に入(いり)て満(ミチ)て人となる男女(ダンジョ)用(ヨウ)あり又死して空となるうとおもへども又人となり人となるうとおもへども空となる内(うち)心のおもきところにて貴人(ダイトキヒト)となり卑人(イヤシキヒト)となれいつくまでもんあるべからざる濁(ニゴ)りのいろいろにて地となり心となるものふたりして天となる中をつなぎ合(ムスビあ)ひて人を生(ウ)み出(だ)す故(ゆえ)に人間(ニンカン)は神(かみ)の心人の心人の心は神の心なれとをよく〳〵さとるべしして国常立尊(クニノトコタチノミコト)なるべし

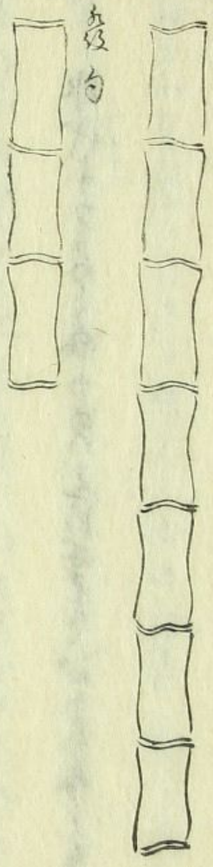
関東一ノ宮船橋
御殿大宮司
冨上伝介平朝臣直利
愚涂

弥代よりうゐぬかのいはせ人のうけつきまもるやまとなでしこ

弥代よりうゐぬかのいはせをおもふあまつきみのゐまるまん

切字結字傳

和歌



發句

和歌七段切

本 萩の花 薄花 梅の花 世界花 蘭 菊の花

末 切とハ 結とハ

發句三段切

眼に青葉 山時鳥 初鰹

本

末 切 結

發句變格傳

變格

梅 赤色の咲せ色 ゝゝ 梅の月 廿日

白い梅の花 梅赤色の咲せ色 ゝゝ ふ切 ゝ

月

井の水 のめ ゝ ゝ ゝ ゝ 後の月 千年

ゝれ ゝ 後の月 井の水のめ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 切 ゝ 色

いゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 中 ゝ 幸 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

り ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

むらさきの　　嵐雲

梅一ぱん一りんわるあるく　　○

同

秋萩をちらしふせて四季庵の月ひかりうえたてまつるさやけさ　　○

古変格のことば知り自得仕るべし　　○

はきぶきていとゞ自得をとゝてまるべし

てハ天ハアメともつらして訓ぞ一ニ従ひ大ハ従ふ
大ハ人の大形一ハ上よりくだりて人の形故よ大の字地
の一畫下まあり

にハ仁みてイツクシムと訓ぞ二ハ地の数なり偶の
形天大ハて地開き昼ハ明らかにして夜ハ暗く一よりして
万ものの始なり易卦一一数をもて自得を爲べし
天地の氣を受て仁心発せざるものなし

をハ遠みてドホシと訓ぞ出よ従ひ□ニ従ひ二人よ
従ひ廷ニ従ふ也出バユクゆを訓を□の中より人の歩を

例ひとる形延ハ人行止ハ見トおキ新く俗ハ延進
入し例も多故ハや

はハ彼みてナしと訓ぶ例ハ以と皮と以ふ例ハナ三
あるハ獣皮ハ文なるべく人のうるを文字ハ模
ハ象れるも

てあをそうらうそうハ新ハ月ハまを改めまをうるく
そうハ一乗ハ春夏秋冬の四季あるべく此四つハ一年
の用ありて体ハ一年あり此一年ハ十年百年ハ年万
年億兆ハ無量の大数ハ数ハ数ハて三千世界ハ
つまるとうるこの〳〵又分重毛忽ハ無量の小数ハ

うるとうるハ三千世界ハ数のうるとうるきのあく仏れの乃ハ乃ハ年
体ハ術のうるとうるハうるのうるとあるうるうるくのあく
術ハうるをのうるあるうるあるうるまるて言語文字をい
例のうるつづき自得するの和ハ故仏曰無所得外
ものハ所求ハ故和歌も歌ハ自ハ年体ハうるうるハてハをを
その指ハうるうるハうるのハ通ハうるあれてハをを
指ハあるあるうるうるハうるうるハうるひるうるうるハ
きうるうるうる

時をあらとしてくれ変あくんぞ人ハ一年もかくしてあくと
を呼ばれハ終てるくるぞ秋ふをもあらよきくくふ今な
れハ一句（イッシュ）一首をつくるあるみもよくくてみをそみん
をくくくらぐくくくふときハ春夏秋冬の景色ちるめ
くあて和歌ふまれ変なるみまれ景色をまるまるけれ
ハ歌ちくるくらをなるもちらされくくちるよう変なを
変ふくくふを一首一句あるうくよくてあをくくをくくの
くふくくくくくをつくくて勧善懲悪（カンセンチョウアク）して仏ぐぐ忠
孝の道お入らんくくふを信ようして変ふぐくくくくくる時
ハてふをくくくくのぐくくくふハあくぐぐくくくるくぐ

くくくき見まくくてにをくくの御伽授（テンジュ）ぐくくくくくハ変くと
ふくくくおくくハまくくくくく

尽くしまるうくらびしられど道の尽くしまる尽くい家よ
あくまて法よたくびして法よりうちを法とまくりふぐ翁
発句のまくうれく義の俳諧ハ長頃丸以後の俳諧とん
俳諧とハまくまハ代くの俳諧ふて大虚より千変
万化して斜用一致の法をとくくまくまる連俳諧
とハ実ある事あり連俳諧ハ長頃丸連歌の式を
うり用ひるかのまれど翁の自然の法式とハまくり
を附ハ長頃丸連歌師ふれハ連歌の式を用ひうを
附義いまさく自然の式をくうるを後人ハ俳
諧ハ連歌の奴僕のやうふくるハ大なるまちへなる

ことをさくくしく義のまいうくハ言語文字の間あ
らび天地人の大概ふありて見えのくくまく心眼ふか
さくてくるべく
漫筆のまくうけうれハそのの自ふあうとい作うまく
ある人問曰爰ふ切字を入うくハ如何愚曰故あるとく
義ふ来て問曰海切字をまくるや曰未熟接なのく雅
自ふまを発句くくくく

さん切字のことは連俳ともふつゝ秘ともづき半ともいはみ
ぐうよりふつゝうゝに第一切字を入るゝいかをきるあるあり
句は若者は乱なることをさとり切るるもうう字をさん
ことときは切字なくゝもきゝもあり又切るる句ふ切字を
いれて切るあいおよぐに切字のよいいまぐ句の切く
るゝ切るゝもきゝぬものゝゝあよ切字の数を字ゝうと
此字をいるゝときは十ふセ八は自ら切るゝあり和二
三は入ても切るる句あう入ぢとも切るゝあり歌敷
ふゝうやはいるあへ切しいるゝのしゝふて切ば或は
三段切これは字のの切ゝゝ各目いあれども必各目

ふ断よぐゝに切るるを是は秘伝なるゝらよやゝ
もあれとも皆人をあぐむきたるに伝言なり
義曰和歌は三十一字のてふをはみて切る句は切字
ふ用るるときはいろは四十八字皆切字あり不用
時は一字も切字なく是字ふゝと降字てを持
さてぐられてゝのや
愚曰義の俳諧のこのうえとるゝとゝろは字ゝるべ
し字ふまれ発句ふまれ切字ゝらふはかの物みあゝに
切のふふ歌ゝる表題言楽愛歌の七つのゝろを
去切半ふて文字のゝをいふふはあゝに此句をゝく

きれて吾(センワク)吾不二(ワレワレフニ)の大虚(タイキヨ)のうちに元別人のおもふ
られをもるときハうのきうれく物(モノ)のあるよ然炊(ウレヒソウラ)く
るなり
或人問曰てゐをもうるハ如何(イカン)去来曰てゐをは
ハ天下一枝のてゐをもて世人もまれる事あれと
よくうけるハあやまりなるあれハよくく心にきるあり
てゐをは一字うごかで所白の意あるを(マウセヅ)見又浄僧授(テンソウジユ)のて
にをもとうるよりてハ去下おもる人をうあり堂(タウシヤウ)をうてて
浄僧授の人多くハまりてはきたるやをうう初て人の
所をもおもてたまうてうのや地方ひて浄僧授あるくハ紹(テウ)

巴負徳芭蕉翁ハ浄僧授あるく人と学てふかく
のめくなるものあれを地のれ東西をきのあるをう
あるうたてうを入て蕉(ショウヘ)をうくて
或人甚角問曰翁の幸崎(カラサキ)の白みかなきハ何
を角曰我翁ハ四人翁曰白意と切字の有(ウム)也意(イ)あ
浅源(セン)を歩(アユ)て低(ワク)るる白みあるた唯眼前(タヽカンゼン)の実(ジツ)
系(ケイ)をうくて地のうまづとおもうう毛髪(モウハツ)色(タメ)あり鉢(ウヒ)
きなりたる地白をなりたる何もうくくるるとあらるで
白色と切字とハあるくたるをうれうるとて
愚曰乾別言語文字あるあらうくくるふあるた是禅(ゼン)

の俳諧とゝまる〳〵程の俳諧とハ柳ハ緑花ハ紅天
地あゝん爾ゝ自地あゝん陰陽ゝゝとゝまらふゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

見悟　池のそこにほきりけるこえて
いろにしるしるぬふるきのえを　石田梅巖先生

鼻悟　まの真もまるき　ふるのうちいうれ　愚

見悟　ちゝ仏　もはくいみるる産屋ふれ　同

聞悟　きめこゝ耳よふこちうう　同

同　ふるゝして　まのまふるるはられ　同

俳諧悟影法師前編終

跋

鶏の尾東雲の空にして此人ありて世癖あり朽ちもの
いとかなりとて集句を牧羅張ふもれをのれら民邪人
狂俳を思ふるしまふのあること月のゆ亀い鶴くの
者ふ親を愛しく輯録の深物ある事うるこい男女
の相見ふよやしひ姫のくいるのひ学事を移ふる
小ふかくく此道よんをはくて分を移しとこと
ふるくをとるふ扶れしく先石門入ふ学ふ導師今井有
貫ふ高ふこのひふ性ふ十余年の春秋をるるとこと

俳諧道ニ机下学得してあれとなく出てこれく
世たるのかたくしして貞享元禄風流をいふのそる
おしまたたくみつのく俳諧性新活ぶとを
つ事周知のもとなん抜きくるを此度書肆文舎
堂のあるもこれを学てくもかくて梓ふ清ん
ゆくせちふたくもるのかの世おのれ雅家をくん
くく事自を沿とくて文ふれとのいやま
ちくよたいこ旬の雪霜をいくきてくく
世集をこんつるよ沿ふもの海ふの時を沿

てくくんけのこふくくもの元をなのもるくもち
かふ嗚呼大哉芭蕉翁徳此道ふて世人あを
よくを祖翁の旬をを作ふよくいまふのくく
たくん私をくくつて唯俳句をくくやきくくる
あのなれを俳諧道のそこの元をる道ふとけのん
りふ古書のよやあらんかくれつくものく
事をくふて書くくくくる日ハ天保八ゝ世丁酉
秋七月望ゆるの

小義庵

唯嶺

前編 俳諧悟影法師 乾坤二巻 鶏鳴庵陸田一貫撰 小簑庵碓嶺校合

此書ハ四季まちまちに神釈別離羇旅名所恋慶弔恵賀ゑとゝ賀ホ

俳諧言葉の綾 折本一冊 鶏鳴庵陸田一貫蔵板

ふ古人の最自の佳句をあつめ俳士学ふ情中ちつき書せ

此書ハ翁句解ふ〜ひふ南時流芳の俳士

新撰発明亜さ〜つ〜て表裏を整る

後編 俳諧悟影法師 金烏玉兎表 鶏鳴庵陸田一貫撰 清玉庵頼益校合

句を新く文章平中と南時し風流のうつ

ちつくる用格とうつ多ちる俳格を記る也

近刻

書肆 江戸両国橋通吉川町 山田佐助版